

2007年10月15日発行

ぷろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

231号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 秋冷の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

いまや、日本の消費者の食品についての関心は「安全」から「安心」へと急速にシフトしていることに「経営者が気づいていない」と指摘されているのです。北海道の「白い恋人」も、「ペコちゃん」の不二家も、菓子業界の有名な大企業です。食中毒事件や健康被害を出してはいないのです。何故？内部や関係者から告発され、新聞やTV等に報道されていくのです！！長い年月かけて築いてきた「ブランドイメージ」は崩壊していくのです。「食品」は人の心に左右される。私が関心を持つのは、会計事務所に似ているからです。

今回、「赤福」とは正に驚いた！！私は関西に行くと、「赤福」をお土産に。家内にも喜ばれます。その赤福、10/13号の「毎日新聞余録」にこんな記事がありました。『今では「老舗」という文字があてられる「しにせ」だが、もともと「仕似」または「為似」だという。「似せてまねる」が本来の意味で、それが「父祖の家業の方針を守って踏み外さぬこと」、「伝統、格式、信用を守って繁盛している店」を指すようになった。その「しにせ」という言葉が、農相の閣議後会見で繰り返し語られた。「信用度の高いしにせメーカーだけに大変重大だ」。伊勢参りのお土産の定番、赤福餅を製造する「赤福」で行われていた製品の消費期限の虚偽表示についての発言である。

「名物を食うが無筆の旅日記」といわれた江戸時代、赤福餅は1707年に内宮前の五十鈴川のほとりで売られたのが始まりという。ちょうど創業300年だから、来歴からすればしにせ中のしにせといえる。だが問題は「父祖の家業の方針」を守って踏み外さなかったかどうかだ。

農水省の調査によると、赤福は一部商品を冷凍保管し、後日解凍後に包装を改め、消費期限を再設定していた。この「まき直し」といわれる操作は34年間にもわたって続けられ、最近3年間の製品の18%、600万箱がそうした品だったという。またもや発覚した有名土産品の虚偽表示だ。

保存料を使わない生菓子が売りだった赤

福餅である。品質調査では「衛生的に問題ない」というが、だから「まあいいや」といくわけがない。「伝統、格式、信用を守って繁盛する店」ののれんに信頼を寄せた消費者の失望を過小評価してはいけない。「赤心慶福」——赤心（まごころ）をもって人の幸福を祝い喜ぶというのが赤福の由来という。その父祖の「赤心」をまねるよりも、小零細企業のように「まき直し」に手を染める小ずるい業者に自らを似せていては、しにせ落第といわれても仕方ないようです。』

経理なくして経営なし

戦国時代の名将「信長、秀吉、家康 等々」は、今の経営者に共通点ばかりです。「領地を守り、領民を豊かにする」ために戦ったのです。戦略、戦術、経営手腕、人間管理法は、時代は変わっても社長の本質は変わらないのです。企業にとって「つくる」「売る」「管理する」が必須条件です。中小企業にとって「つくる」「売る」が最優先になってしまい、忘れてしまうのが「管理」です。会社が潰れてしまうのです。冒頭の「赤福」にしてみても「売る・つくる」ことばかりが優先されて、「管理」の「コンプライアンス」のことが、おろそかになってしまったようです。

NHKの大河ドラマ「風林火山」武田信玄、山本勘介のドラマです。企業経営に参考にされることがいっぱいあります。皆様も見ていると思うのです。

上杉謙信との5回にわたる川中島の合戦で、歴史上に名を残す武田信玄。1521年から1573年にかけて活躍した戦国武将です。彼は人間観察や人心掌握に長けていたとも言われ、部下の欠点を長所に変えるというエピソードを多く残しています。

武田家中に「岩間大蔵左衛門」という武士がいました。大変な臆病者で、人一倍恐怖心が強く、刃物屋の看板を見るだけで身体が震えだすという有様でした。豪気が求められる戦国時代のことから、臆病者は周囲から軽蔑され、存在価値すら認められません。

そこで重臣たちは、少しでも勇気をつけてやろうと合戦の際に大蔵左衛門を最前線に立たせました。しかし怯えて逃げ帰ったり、恐怖のためにひきつけを起こすので、しまいには皆があきれ果てて、信玄に「お屋形様、あのような者は武田家の恥辱です。即刻、追放なされませ」と進言しました。

しかし信玄は、「いや、待て。臆病というのはただ小心なだけではなく、気持ちの細かいことにもよるのだ。その特性を活かしてやれば、まだまだ使い道はあるはずだ」。

信玄は考えた末、大蔵左衛門を「訴人係」に任じました。訴人係というのは、家中の動向を探り、もし不正や悪事があれば上司に報告する「隠し目付」の役回りです。今流にいうと「経理・人事・労務等」の課長です。武田信玄は家臣の意見を大事にしています。しかし、家臣が功名のために独断専行されたり、「報・連・相」がうまくいかず、情報が届かなかったことのみずさも多かったです。

そこで、大蔵左衛門が「管理担当役」と

なり、家中は緊張しました。小心者は細かいところにもよく気がつきます。それらを信玄に報告されたとなれば、家臣たちは常に気を引き締めるようになり、城内にはいい意味での緊張感が漂うようになったといえます。「報告・連絡・相談」事が生かされて来ました。

信玄は「人は城、人は石垣、人は堀」という名言を残していますが、人は必ずどこかに取り柄があるものです。その長所を発見し、適材適所として人を配したところに、信玄の偉大さが発揮されて来たのです。経理（経営管理）なくして経営なしといわれています。

そこに集う一人ひとりがワクワクする会計事務所を！！

1日の大半の時間を過ごす場所が会計事務所です。その会計事務所、働き・給料をもらうだけの場になってしまえば、こんなつまらない事はありません。仕事を通じて本来の自分を発見することが出来れば、仕事に対する姿勢まで変わってきます。また、仕事の中に成長があり、個人の人生においてもよい方向への大きな変化が起こることでしょう。

本来の自分とは、得意なことをやり続けている中で見つかったり、感動して泣いたり笑ったりしたときに発見できるのではないのでしょうか。機械的な作業ばかりやっていると、感動は得られません。企業と社長の成長を願う心を持てば、たとえそのような仕事が与えられたとしても、工夫し、熱意があれば感動へとつながります。

企業の「企」という字を分解すると、人が止まる、と書きます。企業に集う一人ひとりがそこに止まり、価値観を共有しながら“業”を行っていく。それが企業というもの。はじめは生業・家業へと。更に真剣さが、多くの人々から評価されて企業になっていくのです。会計事務所もその気であれば企業になります。その企業は、誰もが安心してそこに止まれる良い環境にしていけばよいのです。マニュアルはあくまでも仕事の入り口と考え、成長すれば、自分判断しなければいけない要素を、仕事の中に多く作ることでないのでしょうか。「会計・税務・診断そして事業計画」、そして会計事務所の王道を進むことができるのです。

全ての事業は、自他共に利益することによって繁盛します。お客様が繁盛して成長することを願っていきます。私たちは、「お客様の成長を願っていく」使命を持っています。そうしていく中で未来の方向性も見えてくるはずですし、未来の自分というものも発見しやすくなるものです。

仕事を通じて本来の自分を発見できた時、仕事に対する姿勢が変わってきます。そういう人が多くなればなるほど、ワクワクする会計事務所、出勤するのが楽しくて仕方のない会計事務所になっていくでしょう。所長先生の「夢と目標」「あきらめない」「ゆるぎない心」が何よりも大事です。これからは会計事務所環境は、益々きびしくなっていくと思うのです。所長先生の「ゆるぎない心」を持ち続けてほしいと思っています。